

神武・倭国の連合東遷説

2018年7月 白崎 勝

神武・倭国の連合東遷説とは

神武と倭国が連合して東遷した説である。略して「連合東遷説」という。

東征にあたり神武兄弟は、まず高天原に出向き当時の倭国女王・台与(豊受大神)と東征・東遷を諮り、邪馬台を大和に遷すことを決めた。

【神武・倭国による連合の根拠】

都を移す東遷がこの先、国の歴史に残る重要な事業と考え、古代人は記録する工夫を行っていた。その一つが同名同種の山に足跡を記録することであった。

図1は高取山と鷹取山の全国分布である。東征の進攻方向(ベクトル)を記録したもので、高取山が出発地、鷹取山で当面の目的地を記録していた。

奈良より西が神武東征、東は日本武尊東征の記録で、二つの東征は一連の建国の事業と、とらえていたことが分かる。

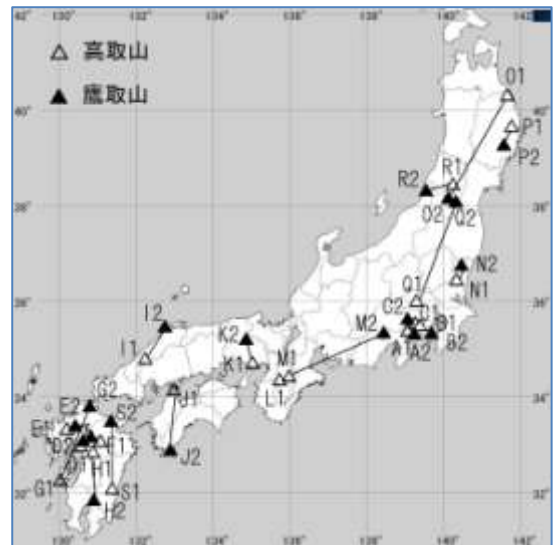


図1 全国の高(鷹)取山の分布

図2は九州の高取山と鷹取山の配置で、東征出発前の状況を記録していた。

ベクトル F1→F2 は、高千穂宮で神武兄弟が東征を相談した後、朝倉の三角域 T に進んだことを記録している。倭国の都(邪馬台国)に住む、台与(豊受大神)と、倭国連合による東征・東遷の話し合いのためである。

ベクトル H1→H2 で、東征を決めた神武は一旦、投馬(都萬)国に戻り準備をした後、出発したことを記録している。狗奴国比定地の熊本平野を縦断しているの、狗奴国との決着の戦いがあったことが見えてくる。

ベクトル S1→S2 は、記紀が記す東征出発の行程である。S1は西都原にある。陸上部隊があったことが見えてくる。

ベクトル D1→D2 と E1→E2 は、筑紫平野の人



図2 九州の高(鷹)取山の分布

たちが三角域 T に集合したことを記録している。

ベクトル G1→G2 は、天草・島原半島の人たちも三角域 T に集合した後、岡田宮方向に進んだことを記録している。このことで神武東征が、いくつかの部隊で構成されていたことが分かる。このベクトルでは記録されていないが、魏志倭人伝に登場する博多湾沿岸のクニグニも東征に参加していたことが、別な山名で記録されていた。別途報告する。

古事記が記す東征出発の記述の中に、倭国との連合を記した部分がある。

一つは最初の行程を「・・・、すなはち日向を発たして筑紫に幸行でましき。故、豊国の宇沙に到りましし時、・・・」とあり、これを順次式に読めば、まず筑紫に向向していることが分かる。図 2 のベクトル F1→F2 である。

その後、迂回した先の筑紫の岡田宮は、「筑」を「竺」に変えて記録していて、目的地を先に記述したのではない。

二つは岡田宮迂回である。この迂回は北部九州の倭国との連合とする見解は、これまでもあったが確かな根拠がなく推測にとどまっていた。先のベクトルから判明した別な部隊との合流や、遠賀川域での東征のための船を準備するためであったことが見えてくる。

定義 1 倭国の女王・卑弥呼は天照大御神。台与は豊受大神のことである。

【卑弥呼＝天照大御神の根拠】

古事記は天照大御神の父母は、伊邪那岐命・伊邪那美命と記している。

表 1 は伊邪那岐・伊邪那美の名が、魏志倭人伝に登場する 5 クニの名から 1 文字ずつ採った名であることを示している。奴と弥の文字が名前とクニ名で異なるが、それぞれの有力比定地、那珂川の那と宇美町的美から採られたものである。

名前	クニ名	クニの代表
伊	伊都国	天之御中主神
邪	邪馬台国	高御産巢日神
那	奴(那)国	神産巢日神
美	不弥(宇美)国	宇摩志阿斯訶備比古遲神
岐	壹岐国	天之常立神

表 1 伊邪那美岐とクニ名・クニ代表の対応

邪馬台国の痕跡が少なく非実在説もあるが、このことから邪馬台国は実在したクニであった。表 1 のクニ代表は、「別天つ神五柱」の神々を、古事記が記す順にクニに対応させたものである。別途検証した結果、魏志倭人伝が記す倭国乱を収束させるために、話し合ったクニの代表者であった。また伊邪那美岐の文字順は、クニの格順でもあった。

以上のことを踏まえ、魏志倭人伝が記す卑弥呼と、記紀が記す天照大御神を比較すると次のような共通点が多くあり、二人は同一人物である。

- ① 伊邪那岐・伊邪那美の子、天照大御神は魏志倭人伝が記す卑弥呼と同じ、3世紀前半に生きた女性である。
- ② 共に夫がおらず、弟がいた。卑弥呼の弟の名は不明だが、天照大御神の弟には月読命と須佐之男命がいた。
- ③ 表1のクニグニは邪馬台国を除くと、博多湾岸が有力比定地である。邪馬台国の比定地は多々あるが、倭国乱収束の話し合いに参加したとなれば、他の有力比定地と同じ北部九州が有力である。
一方、天照大御神の後継、豊受大神は、図1の九州のベクトルが形成する朝倉の三角域付近に住んだと思われ、天照大御神も同じ三角域に住んだ人物と思われる。
- ④ 伊邪那岐・伊邪那美の名付けの動機は、倭国乱で敵として戦った伊都国宗家の男子と奴国王・神産巢日神の娘が結婚し、その子を統一倭国の王とすることで戦乱を収束することにあつた。天照大御神は父、伊邪那岐命の指名で高天原の主になったが、話し合いで始まる王となる経緯は魏志倭人伝が記す、卑弥呼共立の表現に近い。
- ⑤ 卑弥呼亡き後、女性の台与が共立されている。天照大御神亡き後も女性の豊受大神が継いでいる。
- ⑥ 卑弥呼は魏の明帝から、銅鏡100枚を賜った。一方、天照大御神はニニギの天孫降臨に際し鏡を授けていて、二人は銅鏡とのかかわりが強い。

定義2 台与こと豊受大神は、須佐之男命の娘で出雲の生まれである。

【豊受大神出自が出雲の根拠】

- ① 魏志倭人伝では、壹岐(一大)国・邪馬台(邪馬壹)国など、固有名詞の地名や人名に、疑義が頻出している。これは陳寿の死後、草書体の文章を楷書に書き改めたとき、草書で形がよく似た文字が行間では判断できず、写し誤りがあつたとする井上悦文の説に従う。
壹と台の旧字はよく似ていて、もし台与でなく壹与が正解ならば、壹岐国のように一の文字を使用し一与になったはずで、そうでないから台与(とよ)が正解である。
- ② 古事記の神々の生成において「和久産巢日神の子は豊宇気毘売神という」とある。また、須佐之男命の大蛇退治の段で「また大山津見神の女、名は神大市比売を娶して生める子は宇迦之御魂神」とある。伏見稻荷大社では宇迦之御魂神を主祭神としていて、豊受大神と同一人物である。
- ③ 図3は、古事記の上記のような記

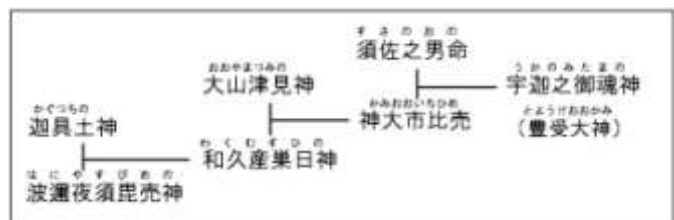


図3 豊受大神の系譜

述から、系譜を作成したものである。ただし大山津見神と和久産巢日神の夫婦関係は推測している。ここに推測が入ったが、豊受大神が須佐之男命の娘であることは変わらない。

- ④ 卑弥呼は天照大御神なので、須佐之男命の娘、豊受大神は卑弥呼に近い宗女である。魏志倭人伝の記述と整合する。
- ⑤ 当時、高天原の天照大御神は出雲の国譲り交渉を行っていて、建御名方神とは長野の善光寺付近で戦いがあった。また播磨風土記によれば、大国主命と天日槍は播磨の奪谷などで戦いになった。天日槍の軍は8千人と記述されていて、大きな戦いである。
- ⑥ この状況の中、須佐之男命の娘・豊受大神が出雲から共立されたならば、出雲国譲りが完了した結果と合わせ、魏志倭人伝が記す卑弥呼の死後の状況と一致する。「あらためて男王を立てたが、国中は不服であった。こもごもあい誅殺した。当時千余人を殺しあった。卑弥呼の宗女の台与なるもの、年13をたてて王とした。国中はついに定まった。」

定義3 神武・倭国の連合東遷に、博多湾沿岸のクニグニが参加した。

図4は、図2の北部九州の高(鷹)取山のベクトルに、○尾山の配置を追加したものである。○尾山の○には異字が当てられている。その中で高尾山は特別で全国的に多く、高尾山・高雄山・鷹尾山を含めると56山がある。

この山は、高(鷹)取山のベクトルを補佐していて、個別部隊の経路などを記録している。○尾山は高尾山を除いて全国に177見つかり、越えた峠など個別なことを記録していた。

【博多湾沿岸国の東遷参加の根拠】

- ① 一支国(高尾山)、末櫛国(高尾山)、伊都国(高祖山)、奴国・不弥国(高雄山)と伊都国のみ異なる山名になっているが、点線で結んでいるように太宰府付近での合流を記録している。
- ② 五島(松尾山)、鹿島(蟻尾山)、武雄(黒尾山)の配置は、魏志倭人伝が記す旁国で、①のクニグニと区別し参加を記録している。
- ③ 大宰府付近で合流後、米ノ山峠を越えたことを、峠に笹尾山と竹ノ尾山で記録している。
- ④ 若松半島の岩尾山と舟尾山を結び伸ばすと、遠賀川河口を指し示し神武隊が迂回

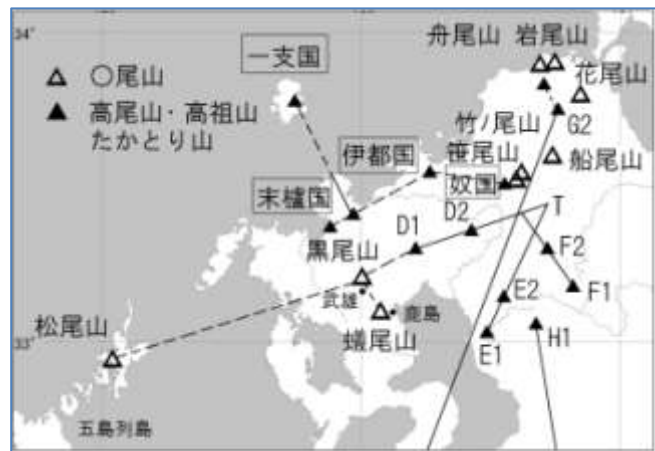


図4 北部九州の高尾山と○尾山

してきた船(岩舟)の停泊地を記録している。

- ⑤ 遠賀川上流の船尾山は、新しく船を造る木の伐採地と思われ、木の川出し地付近には、位登(いとう)古墳があり、伊都国が川出しを采配した痕跡である。
- ⑥ 位登付近から下流 5km には糸田町があり、伊都国が造船を采配した痕跡である。

定義4 倭国の都・邪馬台を、奈良に移した遷都があった。

邪馬台を「やまたい」と読むことが多いが、本来は「やまと」と思われる。また偶然、奈良に別な大和(やまと)が生まれることはないので、この神武・倭国の連合東遷により倭国の都・邪馬台を奈良に遷し、大和になったことは十分に推測できる。

【遷都の根拠】

- ① 先に鏡味完二は、「九州と近畿とのあいだで地名の名づけがよく一致している。」と発表していた。安本美典はこの発表に興味を持ち、地図を開いて北九州の夜須町と大和の国大和郷の地名の一致をみいだした。

図5は安本美典が発表した地名比較図で、地名を線で結んだ形が同じようで、多くが同じ位置に名付けたことが分かる。これは倭国の都の高天原を、同じ地形の奈良に移す遷都の意識が強かったことを示している。

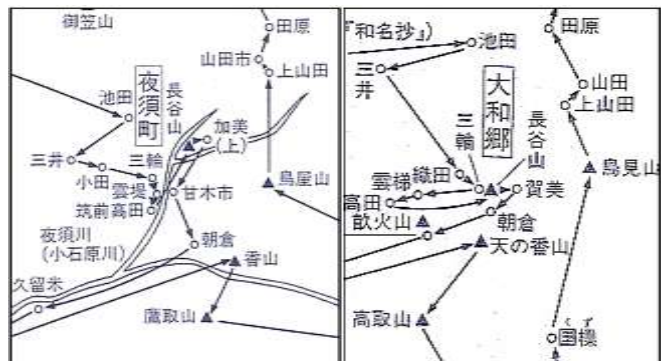


図5 夜須町と大和郷の地名一致図

- ② 日本書紀の神武の檀原即位の項で、次のように記述している。「だから古語にも、これを称して次のようにいう。『畝傍の檀原に、御殿の柱を大地の底の岩にしっかりと立てて、高天原に千木高くそびえ、始めて天下を治められた天皇。』」古語としているが、古くは檀原を新しい高天原と認識していたことを記録している。
- ③ 日本の国名は、倭・大倭・大和の変遷が見られ「大」の1文字の追加は、この連合の際が、最もふさわしい。南部九州の投馬国と北部九州の倭国との連合であったので、新しい都を大倭とし「やまと」と呼ぶことに、神武兄弟と豊受大神の話し合いで決まった。
- ④ 東征の目的地・大倭に「ひのもとの大倭」と枕詞が付いたのは、兵たちを鼓舞するため東遷の最中である。「ひのもと」には山の向こう側の意が含まれているので、奈良で生まれたのではなく、生駒より西の領域で生まれたものである。

定義5 神武・倭国の連合隊は、狗奴国との戦いを決着させて出発した。

定義7 倭国の女王・卑弥呼が住んだ都（高天原）は、福岡県上座郡・下座郡。

古代は上座郡（かみつあさくらぐん）、下座郡（しもつあさくらぐん）と呼んでいたが、明治になって「じょうざぐん・げざぐん」の呼びになった。

【都(高天原)は上座郡・下座郡の根拠】

① 図1で九州のベクトルが、朝倉市付近に三角領域 T を形成していると案内した。

図11は、その三角域Tを拡大したもので、筑紫平野北部の扇状地形にある。1辺は約10kmの大きさである。

② 高木・甘木・杷木の三点を結んだ概略領域が高天原である。この3地名の頭を取った（高・甘・杷＝高天原）は高天原を残そうとした古代人の工夫の痕跡である

③ 形成された三角域 T は、領域の左半分にあり、下座郡に該当する。この中央部に三奈木の地名が残るのは、先人が残した工夫を解くヒントである。

④ 古代の天皇・皇后が九州に下った際に留まっていた、ここ朝倉は天照大御神が住んだ高天原と知っていた痕跡である。

●景行天皇の熊襲討伐では、討伐の最後に筑後川対岸の浮羽にやってきて、食事をされたと日本書紀は記している。麻底良山の筑後川対岸に鷹取宮が残る。

●仲哀天皇の熊襲征伐に同行した神功皇后は、天皇が亡くなられたあと熊襲征伐を引き継ぎ、高天原に近い荷持田村（のとりたのふれ、現在地・朝倉市秋月野鳥）の羽白熊鷲を討ちにやってきた。

●斉明天皇は西征の際、麻底良山近くに朝倉橋広庭宮を建て遷った。ここで亡くなった。

⑤ 扇状地奥の式内社・美奈宜神社は、羽白熊鷲を討てたのは天照大御神の助けがあったからと、神功皇后が創建したものである。美奈宜（みなぎ）の名は（高・甘・杷＝高天原）を知ったうえでの美奈宜である。

⑤ 三角域右辺領域は、上座郡にあたるが、図11のように高倉山と高山（こうやま）を結んだ線上に麻底良山がある。この山頂に天照大御神一族を祀る、式内社・麻底良布神社がある。

⑥ 福岡県には天照大御神を祀る式内社は3社あるが、そのうち2社が朝倉にあり、この集中は高天原の痕跡である。

⑦ 高山は、岩屋戸事件で天照大御神を招きだす真榊など、種々を求めた天の香山とされるのも痕跡である。

⑧ 岩屋戸事件の場所は高山の麓の志賀神社と比定した。志賀神社がある塚原集落に



図11 朝倉付近の三角域の拡大

は、神社で酒を酌み交わす祭りが残り、岩屋戸事件の内容と重なる。

- ⑨ 甘木付近を流れる小石原川が別名、天の安の河とされるのも、高天原の痕跡である。付近には現在はないが夜須町があった。
- ⑩ 比定地糸島市の伊都国から須佐之男命がやってきて、小石原川を挟んで天照大神と対峙したならば、対峙の方角や小石原川が高天原の境である状況が記紀記述と一致する。
- ⑪ 小石原川は筑後川ほどの大河でなく、小川でもない。古代と地形は変わっているが中河川であることは不変で、互いに川を挟んで30mほどの距離で対峙し、言葉を交わしたとすると記述と整合する。
- ⑫ 小石原川が筑後川と合流する付近には、多重環濠が残る平塚川添遺跡が見ついている。この付近は地下水位が浅く、天の安の河での対峙後、誓約のため天真名井の3か所を掘ったと記す日本書紀の記述とも一致する。
- ⑬ 三角域中央を佐田川が流れている。上流の鳥屋山付近には佐田村があり、本名・佐田彦とされる猿田彦神の出身地と比定した。高天原を出発した天孫降臨の先遣隊が、猿田彦神に遭遇した八街は日田とする説があり、遭遇後のやり取りや天孫降臨参加の記紀記述状況が一致する。
- ⑭ ニニギは天孫降臨の際、高千穂町のくし触神社（くしふるじんじゃ）の裏手で、高天原遥拝を行っている。遥拝した向きを碑の石積方角で計測したところ、三角域 T の底辺部に向いていた。画像 1 は遥拝所風景。



画像 1 櫛触神社の高天原遥拝所

定義 8 魏志倭人伝の行程方角基準は、当時の倭人が使用した基準で、マイナス 28 度偏向していた。

ここでは魏志倭人伝の方角・行程などから、卑弥呼が住んだ倭国の都(三角域 T)の根拠を求める。

【方角偏向の根拠】

この偏向角度は夏至の日の出方角を東としたときの、南北線に相当し当時の倭人が、使用した基準である。

- ① 図 12 はマイナス 28 度偏向した南北線で、魏志倭人伝に登場するクニを結んでいる。この配置は偶然と思われるが一部意図的なものがある。
- ② 西側の第 1 南北線は、狗邪韓国・対馬国・壱岐国・末櫛国が高千穂峰までの直線で結ばれる。

ニニギは高千穂峰で「此地は韓国に向ひ、・・・」と詔し、この高千穂峰が特別な

- 日の、特別な方角にある山と認識していた。
- ③ 東側の第2南北線は不弥国、邪馬台国、狗奴国、投馬国が、この偏向基準で結ばれる。ニニギは投馬国の中心にある都萬神社位置を、特別な日の邪馬台国の南であることを認識したうえで選んでいる。
 - ④ 第2南北線を北に伸ばすと沖ノ島に結ばれる。天照大御神は、須佐之男命との誓約で成った多紀理毘売を、この奇跡の沖ノ島（胸形の奥津宮）に派遣していて、この方角基準を知っていた。
 - ⑤ この基準は、大山津見神が国生みの時代に、日本列島の形を日の出方角基準で認識して生まれた。

図13は日本の大山の分布の一部で、日本の本州の屈曲点が富士山と認識している。この富士山より西の海岸線は、夏至の日の出方角に平行だと記録している。

これを西に延長すると高千穂峰を経て、魏志倭人伝が記述する会稽・東冶に至る。魏志倭人伝は、倭人が認識していた日本の形状の情報を得て、会稽・東冶を導き出していた。

- ⑥ 富士山より東北の背骨を走る直線は、立春の日の出方角を基準とした南北線である。

【魏使上陸後行程における方角の検証】

- ⑦ 図14は魏使が末櫨国（呼子港）から伊都国（細石神社）～奴国（春日市岡本）～宇弥国（宇美町）～邪馬台国（甘木）と進んだとして、マイナス28度偏向した基準で魏志倭人伝が述べる方角が合致するか検証した結果である。全て比定した地点で合致した。



図12 クニの配置の偶然



図13 大山津見神の日本列島の認識

方角	夏至の日の出方角基準値	範囲	比定地の方角	角度	判定
東	6.2	39.5-84.5	岡本(奴国)~宇美町	59.6	○
東南	10.7	84.5-129.5	呼子港~細石神社	90.7	○
			細石神社~岡本(奴国)	89.2	○
南	15.2	129.5-174.5	宇美町~甘木(邪馬台国)	138.3	○

図14 魏使行程の方角記述の検証

定義9 魏使行程の里程は、1里=76.5mで記述している。

魏使行程の方角基準を定義したので、距離基準について定義する。長里説と短里説の論争があるが、ここは短里説に該当する。

【距離基準の導き出し】

谷本茂が漢書「周碑算経(しゅうひさんけい)」の記述から求めた、千里=76.3~76.9km(平均76.6km)の数値がある。

周碑算経は洛陽の南北二千里の間に80寸の3本の棒(周碑)を立て、夏至の正午の影の長さを測定した値を記述している。

図15に示したように、影の長さ(16, 15, 17寸)を直角三角形の高さ、周碑の高さ(80寸)を底辺としたタンジェント角を求めることができる。太陽光線と北回帰線は平行とおけるので、この角度は図に示した、北回帰線と周碑の位置がつくる地球の中心角 θ と相対角になり一致する。

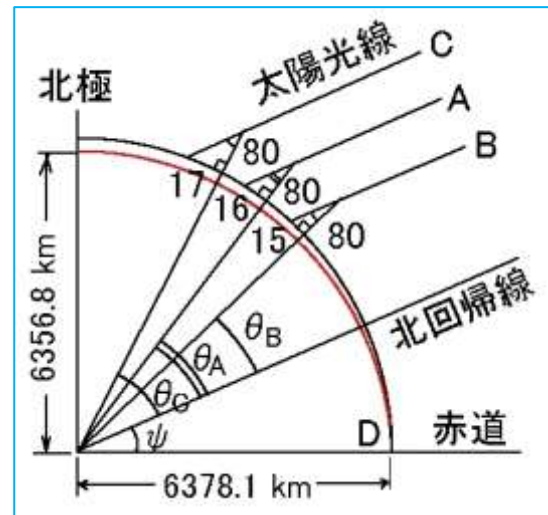


図15 周碑算経の概念

地球を円と仮定すれば、この中心角 θ_A 、 θ_B 、 θ_C から、北回帰線からの、周碑の位置A、B、Cまでのそれぞれの距離を求めることができる。求めた距離の差A-B、C-Aの値が千里の距離となる。計算過程は省略し結果を記すと。

計算結果 A-B間が 76.70 km

C-A間が 76.35 km 平均

76.5 km

そこで平均値の76.5kmを、千里とした。

谷本茂の計算との違いは、谷本が極半径Rを6,357kmとしていて、本説は極周長を40007.88kmと置いたことの違いである。

千里を76.5km、百里を7.65kmとして行程を検証すると、行程の経路や計測方法が見えてくる。

【距離基準での有力比定地の検証結果】

① 狗邪韓国～対馬：「始度一海千余里至対馬国」

図16のように狗邪韓国の比定地、金海の海岸から、対馬の海神神社前の浜までが約千里であることから、潮流を考慮し迂



図16 渡海の千余里

回したかもしれないが、直線距離の値であることが分かる。ここから浅茅湾内は倭人が案内し小船越を越えた。

- ② 対馬～壱岐：「又南渡一海千余里名曰瀚海至一大国」
小船越～壱岐の筒城浜までが約千里である。壱岐の東側海岸伝いであるがほぼ直線距離の値である。
- ③ 壱岐～末櫨国：「又一海千余里至末櫨国」
筒城浜～呼子港に進み上陸し陸行した。この間①②同様マイナス 28 度偏向した方角の南であるが、魏志倭人伝には方角の記述が無く、しかも距離は千里の記述のところ 400 里しかない。これは、呼子港で魏使が下船し、船は唐津湾伝いに伊都国に積み荷を運んでいた。伊都国の港までが約千里である。船の方角には変更があったので方角を記載をしなかったと考える。
- ④ 末櫨国～伊都国：「東南陸行五百里到伊都国」
魏使は呼子港から陸行し、伊都国の入り口（国境）までが魏志倭人伝が記す 500 里である。
- ⑤ 伊都国～奴国：「東南至奴国百里」
伊都国の中心地・細石神社から奴国の中心地・春日市岡本の熊野神社までは、日向峠越で約 336 里あり、逆立ちしても記述の 100 里には合わない。これも、飯場峠越の経路で早良に入り那珂川町を経由するルートである。この国境、飯場峠までの 100 里を記述している。
- ⑥ 奴国～不弥国：「東行至不弥国百里」
熊野神社から宇美町中心の宇美八幡宮までの距離で、約 100 里である。④⑤が国境までの距離だったが、ここでは国の中心間距離となっている。これを東行と「行」の一文字を加えて区別している。
- ⑦ 投馬国：「南至投馬国水行二十日」
これは伊都国または呼子港から水行 10 日の行程であった。航路は別途定義する。
- ⑧ 邪馬台国：「南邪馬台国女王之所都水行十日陸行一月」と「自郡至女王国万二千余里」

これは呼子上陸後の陸行が一月だった。帯方郡から一万二千余里の記述で、伊都国や不弥国までの記述距離を合計し、一万二千余



図 17 魏使の呼子港上陸後の経路想定図

里から差引して邪馬台国までの余里を算出するのは、途中の記述が国境までの距離なので合致しない。呼子港までの水行 10 日の一万里を差し引いた、呼子港～不弥国～邪馬台国の二千余里（約 153 k m）が適合する。

- ⑨ 図 17 は、これまでの検証結果から想定した道路地図経路である。距離 143 k m、1867 里が得られた。古代の道は曲がりくねっていたと思われ、距離は二千余里に近づく。地図の邪馬台国の須川は、卑弥呼宮殿があったと想定している集落である。

定義 10 魏使行程の投馬国へ水行 20 日は、九州西岸の水行 10 日の航路である。

【水行 10 日の根拠】

- ① 図 18 は対馬から九州西岸を経て鹿児島湾内に続く、長崎鼻を結んだもので附番 ⑪～⑳までが水行 10 日の航路である。
- ② 帯方郡からが水行 20 日の航路になる。宮浦宮が終点なのは、日向・大隅・薩摩の中心にあり、時の大王が何処にいても向かうのに便利な為と、佐多岬沖の外洋を通らない安全な航路を選んだためである。
- ③ 九州西岸の経路も安全な陸沿いや内海を通っている。
- ④ この長崎鼻は寄港の浜に入る目印の岬に名付けたもので、表 2 のように近くには見張りの山が名づけられている。
- ⑤ 1 日の平均漕航距離は 54km であった。
- ⑥ 長島付近に二つある長崎鼻のうち、東側・黒之瀬戸付近にある長崎鼻は、ニニギの天孫降臨を先導した猿田彦が、黒之瀬戸を渡海した時に名付けている。この名は猿田彦の長い鼻に由来するかもしれない。
- ⑦ 投馬国への航路は、ニニギの子・山幸彦が結婚した妃・豊玉媛の



図 18 投馬国へ水行 10 日の航路図

日程	港、浜または島	距離 Km	港の目印	見張り山
⑧	対馬市豊玉町鍾川		長崎鼻	
⑨	壱岐原の辻、筒城浜	9.2		岳ノ辻
⑩	呼子	3.3		
⑪	馬渡島	1.6	長崎鼻	番所ノ辻
⑫	的山大島	2.2	長崎鼻	番所岳
⑬	黒島	5.0	長崎鼻	番岳
⑭	長崎半島の脇岬	8.2	長崎半島	遠見山
⑮	天草市の鬼池	4.9	長崎鼻	天神山
⑯	長島の西岸	5.5	長崎鼻	物見鼻
⑰	串木野港付近	5.7	長崎鼻	遠見番山
⑱	坊津	6.6		番屋山
⑳	指宿の長崎鼻	5.2	長崎鼻	辻の岳
	宮浦宮	8.6	長崎鼻	

* 投馬国へ距離 約 535km 平均漕航距離 約 54km/日

表 2 投馬国航路の寄港地

父・豊玉彦が拓いた航路である。

- ⑧ 対馬の浅茅湾には旧豊玉町があり豊玉彦が魏使を迎えたところである。魏志は大官を卑狗（彦）と記している。

定義 11 ニニギの天孫降臨は薩摩・大隅を巡る、7年をかけた国造りの遠征であった。

【天孫降臨7年の根拠】

- ① 図 19 は南九州に集中して見つかる ○○丘という山と、○○岡という山に番号を付けて、結んだものである。
- ② 朝倉の高天原を出発したニニギは、阿蘇を越え高千穂町の国見ヶ丘（図にないが附番1）で新しい国の国見を行った後、西都に向かい宮をおいた。
- ③ 宮崎平野の灌漑稲作の目途が立つと、薩摩・大隅へ遠征をおこなった。この遠征が天孫降臨と記されている。
- ④ 図 19 の 21, 22, 23 を結んだ直線を点線のように延長すると、高千穂峰横の虎ヶ尾岡を経て 39, 40, 41 がつくる矢印で西都方向を指し示している。これはニニギが詔した、「此处は韓国に向ひ、笠沙の御前を眞来通りて、朝日の直刺す国、夕日の日照る国なり。故、此处は甚吉き地」の内容を大地に記録したものである。附番2から始まる遠征は高千穂峰を周回する、逆「の」の字形に薩摩半島、大隅半島を経て八代海の獅子島にある黒崎丘で終わっている。日本書紀の一書は「不毛の地を丘続きに求め歩いて・・・」と記している。
- ⑤ 図 19 では丘と岡の区別を表示していないが、図 20 に示すよう「丘—岡—丘」というように丘と丘の間に岡を記録しその間が1年を有したと有年ヶ岡で記録している。この遠征に7年をかけていた。
- ⑥ 附番 21 は牟礼ヶ岡で、牟礼とは岡の意味であるから、「岡ヶ岡」あるいは「岡の中の岡と解釈できる。天孫降臨

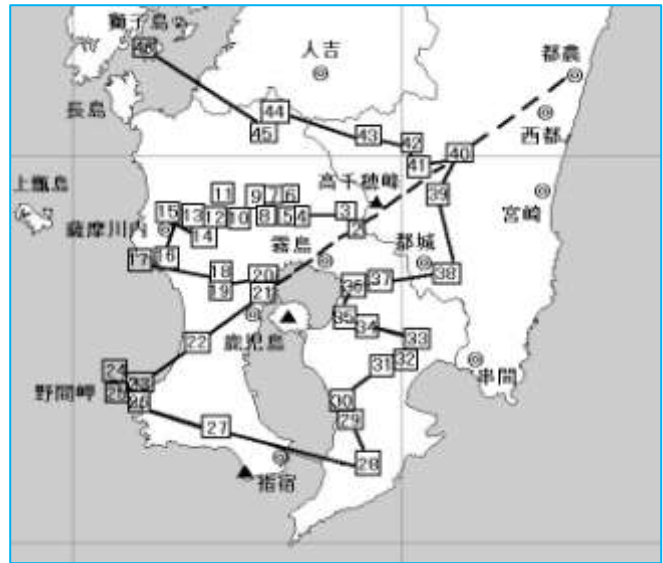


図 19 天孫降臨の経路

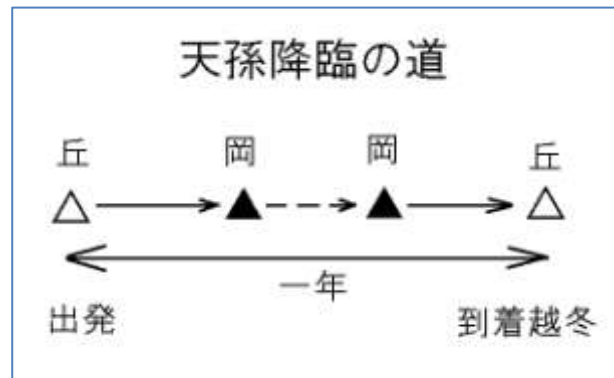


図 20 天孫降臨の道の名づけ方法

の経路をよく見ると、大隅半島の丘や岡を結んだ線が、附番 21 牟礼ヶ岡に集中している。検証すると無意味に名付けた丘・岡は一つも無かった。

- ⑦ 丘の中の一つ宇都丘の「宇都」と同名の宇都地名が、南九州に多く見つかれば訪ね巡ると、灌漑稲作の水を得る川の最上流の田んぼがある集落と判明した。これは灌漑稲作普及のために水利権を取得するためであった。
- ⑧ 高千穂峰にまず登ったのも、一帯の水利権確保の意味があったかも知れない。高千穂の名そのものが稲作である。灌漑稲作を普及させる投馬国の建国であった。
- ⑨ ニニギがはじめて水稻をつくったと伝わる、「狭名田の長田」は霧島川の最上流にある田んぼであった。
- ⑩ 神武東征時に迂回した北九州で「岡水門」「岡田宮」と岡がつく地名を残したのは、天孫降臨に由来する。山に岡の名を名付けなかったのは天孫降臨と混同するからだった。
- ⑪ 岡の一つに「貝吹岡」がある。岡を使わない「貝吹山」が檜原と伊勢に見つかる
- ⑫ 明日香にある「甘檜丘」の名づけに、「神武東征はニニギの国造りの延長であり、区切りでもある。」の意思が見て取れる。
- ⑬ ニニギが行った山への、丘(岡)という名の記録は、神武東征や日本武尊東征へと引き継がれ、さまざまに工夫した同名同種の山で、日本の古代を記録していた。

定義 12 当時、九州には北部に倭国、倭国に囲まれた狗奴国、大分の碩田（おおきた）国、九州南部に投馬国があった。

【倭国と投馬国領域の比定根拠】

図 21 は九州にある宇都・宇土・鵜戸地名の分布である。この分布から倭国・投馬国の領域を比定する。

- ① 投馬国は南九州の日向、大隅半島、薩摩半島、種子島、屋久島、長島、甌島を含む領域である。日向地域と天孫降臨した地域の大隅・薩摩は、鵜戸と宇都以て区別している。
- ② 九州島内の倭国は、星印の地域と、五島列島が含まれる。星印を結んだように熊本平野の狗奴国は倭国領域に囲まれていた。
- ③ 九州北西部で盛んにおこなわれている神幸祭「くんち」は、熊本平野と投馬国の九州南部にはない。
- ④ 投馬国のニニギ命、日子穂穂手見命（山幸彦）、ウガヤフキアエズ命は、魏志倭



図 21 九州の宇都・宇土・鵜戸地名

人伝が記す一大率で、星印を結んだような経路で諸国を檢察していた。

- ⑤ そのことが神幸祭「くんち」として残った。「くんち」は別名「おのぼり」「おくだり」と呼ばれていて、頻繁に倭国と投馬国を行き来している。
- ⑥ 投馬国内は自国領内なので檢察の必要がなかった。投馬国内の神幸祭は、天孫降臨のことを呼んだ「浜下り」の名で今も残る。
- ⑦ 人吉は「くんち」が残ることから、投馬国でなく倭国の領域である。
- ⑧ 景行天皇が筑紫に下った時、土蜘蛛と戦った大分の古い呼び名、碩田国（おおきたのくに）は、女王国に属していなかった。狗奴国と戦った高城山隊と、日向を出発した神武隊は合同で碩田国と戦った。
- ⑨ 「うと」は伊都国の有力比定地、糸島市日向峠の麓にある「宇土」が元となった「うと」である。

定義 13 海神・豊玉彦は投馬国へのみならず、西日本各地へ航路を拓いていた。

図 22 は豊玉彦が、西日本に拓いた航路である。

赤三角印は寄港地に入る目印の長崎鼻である。寄港の浜には白浜や、豊玉彦由来の豊浜や玉ノ浦などの名が当てられている。

白浜の名づけは伊都国の有力比定地、糸島市二丈深江の白浜が元の白浜である。

【図から読み取れた航路】

- ① 伊都国から最長の航路は、下関海峡を越え、四国西岸、四国沖、熊野沖、東海沖、房総沖を経る銚子に至る航路である。寄港地約 28 が見つかる。魏志倭人伝が記す「又有裸国黒齒国復在其東南船行一年可至」の航路で船行一年は、寄港地の数から船行一月の誤りである。
- ② 「又有侏儒国・・・去女王四千余里」の侏儒国は、遠賀川河口の白浜発～(1) 下関海峡を渡った先の豊浦～(2) 国東半島の長崎鼻付近～(3) 佐田岬半島の長崎鼻付近～(4) 宇和島の白浜の 4 航海、約 230km と想定する。
- ③ 白浜山が小豆島、笠戸島、萩市の山中に見つかる。小豆島の白浜山を基点に指し示す銚子を黒齒国、鳥羽の

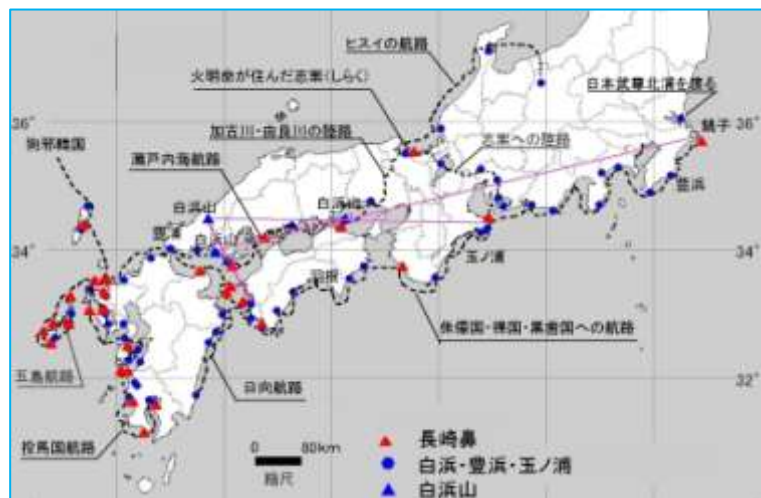


図 22 西日本の古代の航路図

菅島付近を裸国と比定した。

- ④ 女王国に属しない、大分の碩田国（おおきたこく）を迂回する、宇和島から日向への航路があった。
- ⑤ 瀬戸内海航路は姫路の白浜に至る。ここから日本最低高度の分水嶺を越える加古川・由良川を經由し、火明命が住む舞鶴の志楽への海路・陸路が拓かれていた。
- ⑥ 舞鶴の志楽から日本海の航路が能登半島では陸路横断し、糸魚川から青木湖畔の白浜を経て安曇野にいたる海路・陸路の道が拓かれていた。
- ⑦ 黒齒国の交易品と思われる砥石を最短で舞鶴の志楽に届ける、内陸横断の陸路があった。渥美半島の白浜～吉良の白浜～豊田市の白浜で矢作川を渡る～津島市の白浜付近から木曾川など3川を渡る～稲部市の竜ヶ岳付近を越える～近江の稲部遺跡を経る～琵琶湖を渡り、高島市の白浜～小浜へ山越え～志楽と至る。
- ⑧ その他、五島列島への航路、大村湾内の航路、琉球列島の航路があった。琉球列島航路は最西端の西表島の白浜に続く。図 23 は想定した航路図。

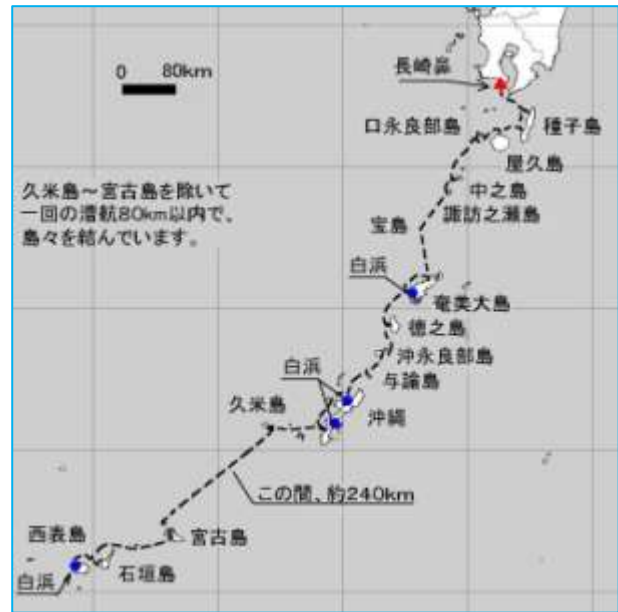


図 23 古代の琉球列島航路図

定義 14 海神・豊玉彦は国生みを記録していた。

連合東遷のまえ、弥生後期、伊邪那岐と伊邪那美は国生みという名の開拓を、四国・近畿・吉備周辺で行っていた。これを後に豊玉彦は龍(竜)王山の名付けで記録していた。

図 24 は国生みがあった四国・近畿・吉備に集中分布する龍(竜)王山である。

龍王とは竜宮城の主とされる海神・豊玉彦の事で、自分から龍王を名乗ることは無いので、ニニギか高天原が豊玉彦に、現地を訪ね国生みを記録させたと考えた。

【龍(竜)王山分布から見える近畿の弥生】

- ① 伊邪那美命が亡くなるまでは、二人は主に四国を拠点に活動し、そこで天照大御神など三貴子が誕生した。その間、近畿



図 24 西日本の龍(竜)王山の分布

の弥生集落を巡り陣頭指揮にあたった。

- ② 図 25 は近畿の弥生集落の近くに見つかる龍(竜)王山である。
- ③ 伊邪那美命は熊野の産田川沿いの開拓の最中、火の事故により亡くなった。この時、伊邪那岐命は西摂の猪名川上流にいた。それぞれに竜宮山を置き、二人の所在地を記録していた。
- ④ 伊邪那岐命は悲しみを乗り越え、四国を離れ吉備の開拓を行った。吉備に竜王山が多いのは、その規模が大きいものだったと見える。
- ⑤ 天照大御神(卑弥呼)はこの開拓の中で成長した。
「豊葦原の千秋長五百秋の水穂国は、我が御子の知らず国ぞ」と述べた強い統治意欲はこの経験からと推測する。
- ⑥ 国生みの後、須佐之男命が向かった出雲には龍(竜)王山が無い。
- ⑦ 播磨、吉備西部・山口東部にも龍王山が無いのは、ここが国生みの空白地であった。播磨風土記で、後に大国主命や天日槍が登場することと符合する。
- ⑧ 図 26 は四国の龍(竜)王山で阿波に多く見つかると。
- ⑨ 熊野で亡くなった伊邪那美命は、阿波に運ばれて吉野川市の高越山に葬られた。那賀町にある⑩竜王山はウジがわく伊邪那美の姿に衝撃を受け逃避した道、高越山から阿南に至る尾根道の里に出たところにある。
- ⑩ 奈良盆地の弥生遺跡・唐子鍵遺跡の東には龍王山があり、伊邪那岐命はここにやってきたと思われる。



図 25 近畿の弥生遺跡と龍(竜)王山



図 26 近畿の弥生遺跡と龍(竜)王山

定義 15 記紀が記す神武東征は陸上隊と共に進んだ。

図 27 は「高(鷹)山」のベクトル図に、主な高尾山を追記して、その位置をつなぎ連合東遷隊の経路を比定した図である。

図 28 は九州から続く高尾山の足跡を抜き出した図である。

【神武隊の経路】

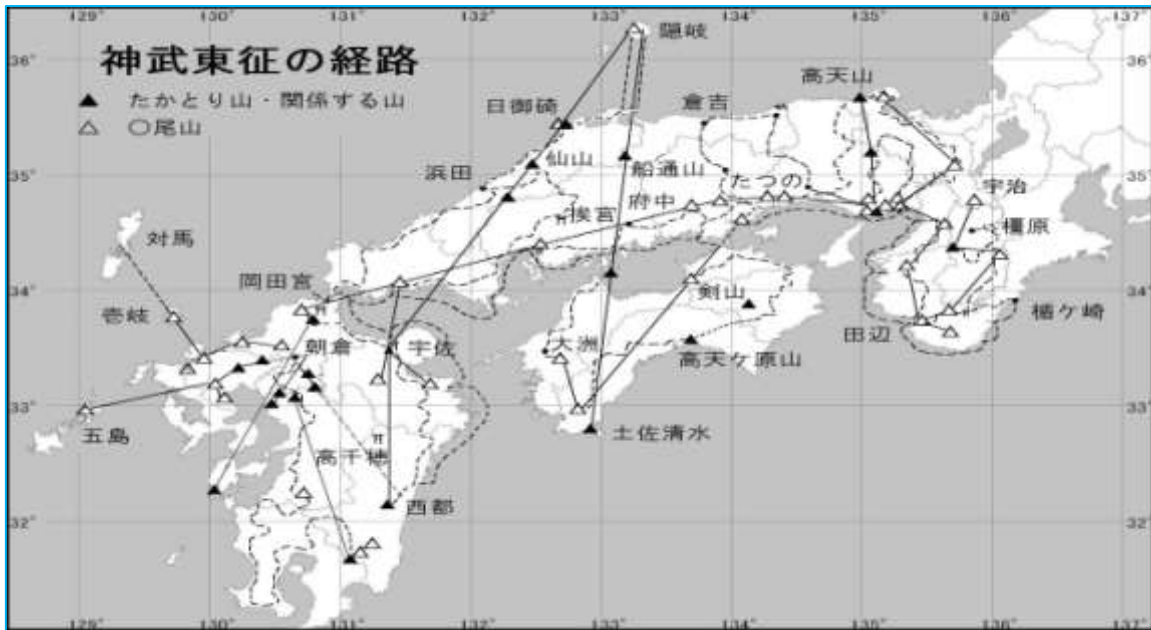


図 27 神武東征の経路比定図

図 27、図 28 から見えてきた神武隊の経路をしてみる。

- ① 記紀が記す神武隊は、瀬戸内海を船で進んでいるが、山陽道を進む陸上隊と連携しながら並行して進んでいた。それを遠賀郡水巻町に始まる、山陽道の高尾山の直列で記録していた。
- ② 山口市の高尾山付近は、日向や筑紫平野の人々が周防灘を渡って、東征隊に参加した集合地点となっていた。港の入り口に藤尾山を残した。
- ③ 日本書紀は安芸国の埃宮(えのみや)に着いたことを記している。その比定地、広島県府中町に残る多家神社埃宮付近に高尾山を残している。
- ④ 吉備では戦いの準備を整えるため、しばらく留まったことを記している。これを赤穂に雄雌の雄を用いた高雄山を名付け、吉備の区切りとしている。また近くの播磨に入る峠に高取峠と名付けている。
- ⑤ 図 29 は六甲山塊にある五つの高尾山・高雄山・鷹尾山である。中心にある高雄山は西からやってきた船隊と陸上隊の合流と区切りを記録している。その内の一隊は芦屋の鷹尾山に向かった。又一隊は丹波に遠征した記録と思われる。

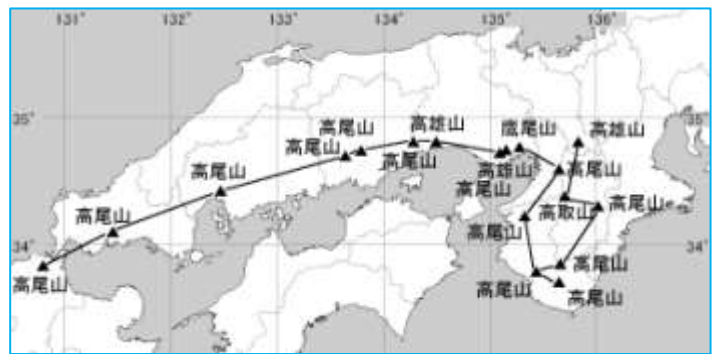


図 28 高尾山に記録した経路

吉野川を遡って宇陀に進んだようにも見えるが、天川村山中に高城山と共に天狗倉山があり、本隊と別ルートで熊野を越えたかも知れない。

- ⑤ 古事記では、宇陀の血原の戦いの記述に高城が登場する。

「宇陀の 高城に 鳴畏張る 我が待つや 鳴は障らず」

血原の地名は2カ所残るが、その中の宇陀市室生区田口元上田口付近に高城山が見つかる。画像2が宇陀の高城山。



画像2 宇陀にある高城山

定義17 高塚山を残した部隊は、出雲から戦闘に参加した。

豊受大神の薩摩下りを警護した後の、高塚隊が残した高塚山の足跡をたどってみる。図31、は九州を離れた高塚山の部隊が、経路に残した高塚山を結んでいる。

【高塚山の経路】

- ① 高塚隊は豊受大神を警護しながら、大神の生まれ里の安来までやってきたと思われる。出雲から戦隊に加わった足跡である。
- ② 安来付近の短い足跡は、別な意味を含ませている。図32はその考えられる意味を地図に表した。

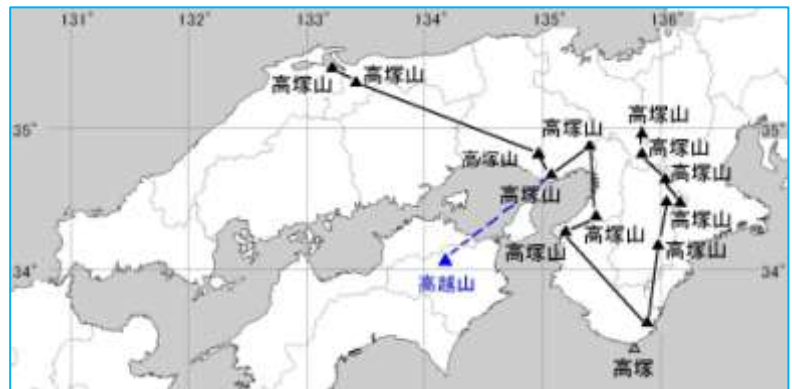


図31 高塚山に記録した経路

●出雲の造山古墳は古墳時代前期のもので、東遷後この高塚山の意味を知る人がここに戻り墓の位置としたと思われる。

●二つの高塚山が指し示したものであれば、松江にある和久羅山が該当する。この山は豊受大神が和久産巢日神の須佐之男命を想う心を残した山である。島根半島の和



図32 出雲の高塚山

久王島との対で、須佐之男命の陵・黒山を指し示している。

●二つの山で指し挟んだとすれば、豊受大神の生まれ里、宇賀荘である。

- ③ 図 31 の点線で示したように、高城山でもあった伊邪那美命の墓標・高越山への指し示しがある。
- ④ 潮岬にある高塚は灯台近くの、原始林の中に残る太陽祭祀跡である。高塚隊が残したもので、この位置が東遷先・檀原の南に位置している意味があったと考える。
- ⑤ 最終の高塚山は宇治を越えて、伏見の稻荷山付近にある。豊受大神を意識した位置である。最終の高塚山と一つ手前の高塚山は 14km しか離れていない。この二つで指し残したものとすれば、纏向の天照御魂神社と考える。豊受大神が天照大御神の御魂をお連れして来て、新しい高天原をお見せしたところである。

定義 18 豊受大神は、天照大御神の御魂と共に東征隊を追い、影から応援し祈り、東遷後を神武に託した足跡である。

【豊受大神の経路】

① 山口市付近に上陸し山陰に進んだように見える。

② いきなり山陽に戻ったのではなく、点線のように生まれ里の安来に寄ったと推測する。稻荷山が島根半島の和久王島付近から始まっている。

③ 吉備付近に高倉山と稻荷山が多く見つかる。

東征隊は吉備で戦いの準備を進めたとあるので、豊受大神もしばらく留まったと思われる。後に豊鋤入媛が巡歴した元伊勢の一つに吉備の「名方浜宮」がある。

④ 戦のあった河内を避けて、淡路島に迂回した経路である。

⑤ 図 34 のように淡路島の高倉山と、泉南と和歌山にある高倉山を結ぶと、それぞれ男神社と竈山を指し挟んでいる。孔舎衛坂の戦いで亡くなった五瀬命を慰霊する足跡である。

⑥ 熊野で神武が萎えていたとき天照大御神の名の下、高倉下を使わして神剣・布都御魂を届



図 33 高倉山に記録した経路



図 34 慰霊の足跡

け励ました。

- ⑦ 東征隊が熊野山中で進退極まった時、八咫鳥を派遣し熊野越えを成功させた。
- ⑧ 宇陀の高倉山では、高倉下の案内で神武と再会し、神武を大王に推戴し東遷後の国造りを託した。
- ⑨ 神武の橿原での即位には立ち会わなかった。投馬国の勢力と北部倭国の勢力で争いになることを避け、摂津から丹後に身を引いた。
- ⑩ その途中、橿原宮の真北にある稲荷山で、新しい高天原の安寧を祈り、南に向けて三度の伏拝を行った。下社神蹟・中社神蹟・上社神蹟（画像3）がのこる。



画像3 伏見稲荷の上社神蹟

定義19 神武・倭国の連合東遷は計画の通り7年をかけ、酉年に神武は即位した。

図35は横軸に天皇の代数を、縦軸に西暦をとり各代天皇の没年を表したものである。神武は第1代なので代数0を即位年と想定した。

問題は没年が不確かで空白とした、20代以下を遡る方法である。これまで平均在位年数を求める方法や、相関曲線を求める方法で推測がされてきた。いずれも用いるデータ（代数）の範囲で結果は変化することで

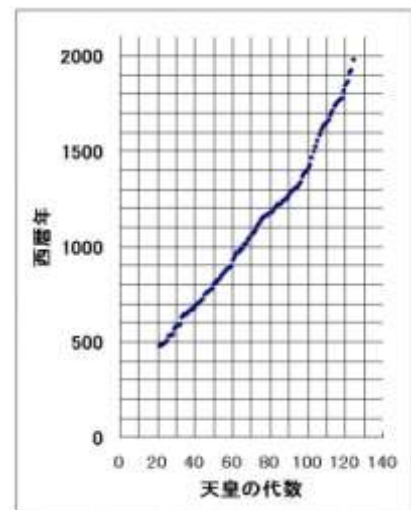


図35 天皇代数と没年

ある。図36は空白部分を拡大した図である。少なくとも代数0と交わる点が、紀元前でないことが分かる。目算では西暦200～350年には収まりそうである。日本書紀は辛酉の元日に即位した、と記していて先の西暦内では241年と301年が該当する。

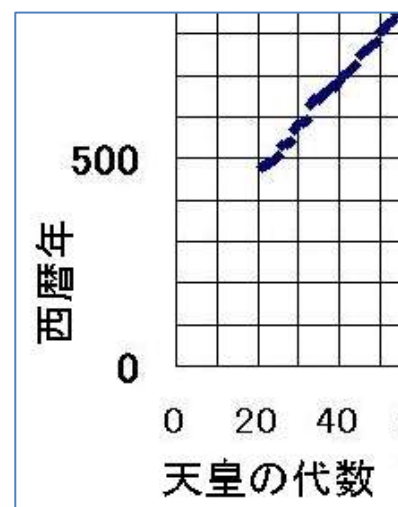


図36 天皇代数と没年 (拡大)

【神武即位年の状況的根拠】

- ① これまで定義してきたように、東遷は天照大御神（卑弥呼）が亡くなった後に、豊受大神と神武兄弟が行った。
- ② 卑弥呼が亡くなって男王の争いの後、豊受大神（台与）は13歳で女王となったので、250年ころ13歳であった。この13歳では東征を決断することは不

可能である。晋への最後の遣使（265 年）を行った、28 歳の後なら決断が可能と考えられる。

- ③ 豊受大神は東遷を行うにあたり、ニニギに東遷を行う報告のために薩摩に出向いている。ニニギが天孫降臨した年数が 7 年と知っていて、この神武・倭国の連合東遷も 7 年と計画したふしがある。
- ④ 日本書紀では干支でできごとを記しているが、十干を省き十二支で見ると、高千穂宮での話し合いから、寅・卯・辰・巳・午・未・申と 7 年を掛け、翌年の酉の 1 月 1 日に即位している。
- ⑤ 東征隊は山名に鷹を用いている。また鳥の尾をイメージした○尾山を名付けてきた。東征隊は自分たちが「神の遣いの鳥」という認識があったように見え、即位年を酉年と決めていたと思われる。即位後、鳥見山に高皇産靈尊を祀った。
- ⑥ 最後の遣使、265 年以降の酉年は、277、289、301 年が該当する。

	卑弥呼の共立	誓約	天の岩屋隠れ	邇邇藝命の誕生	天孫降臨	須勢理毘売の誕生	山幸彦の誕生	大国主命の結婚	事代主命の誕生	鵜茅草葺不合命の誕生	神武天皇の誕生	卑弥呼の死	国譲り	神武の後誕生	最後の遣使	神武東征出発	神武東征終了	神武結婚	神武即位
神武天皇										0	3	11	15	20	25	30	31	32	
鵜茅草葺不合命										0	4	7	15	19					
豊受大神											11	19	23	28	33	38	39	40	
山幸彦							0	13	15	16	20	23	31			45			
邇邇藝命				0	12	13	16	29	31	32	38	39	47						
忍穗耳命		13	14	18	30	31	34	47											
天照大御神	13	19	20	24	36	37	40	53	55	56	60	63							
須佐之男命	11	17	18	22	34	35		51											
須勢理毘売						0		16	18										
大国主命								20	22				38						
事代主命									0				16	20					
伊須氣余理比売又は五十鈴媛命														0				16	
西暦	198	204	205	209	221	222	225	238	240	241	245	248	256	260	265	270	275	276	277

内の値は想定年齢、西暦の太字は魏志倭人伝から導いた西暦です。

図 37 連合東遷関係者の年代シミュレーション

- ⑦ 一方、丹後国風土記逸文の奈具社では、豊受大神が和奈佐という老夫婦に請われて娘となっている。豊受大神が丹後に身を引いたときは、まだ老夫婦から娘になるよう請われる年代であったことが分かる。上記の酉年での豊受大神の歳は 277 年(40 歳)、289 年(52 歳)、301 年(64 歳)となり、東征を追う旅ができる年齢と考え合わせれば、277 年の神武即位の可能性が高い。
- ⑧ 図 37 は 277 年神武即位として、登場人物の年齢をシミュレーションしたものである。姉・天照大御神の系譜の神武と弟・須佐之男命の系譜の伊須氣余理比売が結婚しているので、年代がつながるか模擬している。結果、神武をウガヤフキアエ

ズと異母兄弟と比定し、年齢を若く想定すれば277年即位は可能である。

定義20 神武と豊受大神による連合東遷は、神武の橿原即位と豊受大神の退位、丹後に身を引いたことで終わった。

図38はこれまで、いろいろな根拠から見えてきた、建国の過程を図に表したものである。

【連合東遷説を要約】

- 1 伊邪那岐・伊邪那美の名が、魏志倭人伝に記す5クニ名から、一文字ずつ採った名であることが分かり、この名づけ方法から倭国乱を収束させる話し合いがあったことが判明した。
- 2 梁書の「靈帝光和中、倭国乱」の記述から、伊邪那岐・伊邪那美による国生みは光和年間177～189の189年頃に始まったとした。
- 3 国生みの中で生まれた天照大御神と、魏志倭人伝が記す卑弥呼は同時代に生きた女性で魏志倭人伝の記録と記紀の記録で共通点が多いことから同一人物と比定した。
- 4 天照大御神（卑弥呼）は国生みから戻ると、統一倭国の女王に共立され、都を邪馬台国に置いた。
- 5 天照大御神は孫のニニギを南九州に降らし、都萬国（投馬国）を建国させた。
- 6 天照大御神（卑弥呼）が亡くなると、須佐之男が建国した出雲国、ニニギが建国した都萬国から、それぞれ後継者が男王として立ったが纏まらず争いとなった。
- 7 そこで須佐之男命の娘・豊受大神（台与）が共立されて国中は収まった。
- 8 豊受大神が晋へ最後に遣使した数年後、都萬国の神武兄弟は、高天原に出向き豊受大神に倭国の東遷を建議し、神武・倭国による連合東遷が決まった。
- 9 このとき東遷先の地名を現在の都・邪馬台（やまと）からとり、連合の意味を含めた大倭と書く「やまと」とした。
- 10 北部九州の倭国各地から兵が集められ、一部はこれまで倭国と対立していた熊本平野の狗奴国や、大分の碩田国（おおきたこく）との決着をつけるため南下した。
- 11 神武も都萬国の兵を集めるなど戦いの準備のため、都萬国に戻って再出発した。
- 12 北部九州の倭国各地から遅れて集合した兵は、北九州の遠賀川周辺に移動し、東遷のための船を準備しながら、神武や狗奴国・碩田国で戦った隊を待った。
- 13 豊受大神は東遷の準備を高天原で進めたのち、都萬国に向かいニニギなど国をつ

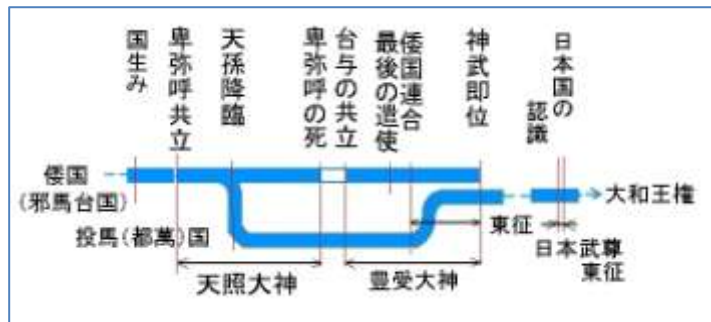


図38 連合東遷による建国の過程図

くってきた先人に、東遷の報告と加護を祈願した。

- 14 東遷の部隊は大きくは神武兄弟の4人が率いる4隊であった。
- 15 北部九州の兵による本体と、南九州兵による神武隊は、山陽道を進み武器や食料の準備、山陰・四国、丹波遠征隊への補充・支援が行われたと思われる。
- 16 戦いの中心部隊は高城隊で、狗奴国・碩田国と戦って、海を渡り山陰に進んだ後、四国に渡り土佐から物部川を遡り阿波に進んだ。その後、鳥取、丹波へと転戦した。
- 17 総力を挙げて、生駒越えで奈良に入るべく、転戦の部隊は芦屋周辺に集合した。
- 18 春、浪速の渡りを行い一旦、竜田に向かったが道狭く孔舎衛坂での生駒越えを決行した。しかし迎えた長髓彦（ながすねひこ）との戦いに敗れた。
- 19 この時長兄の五瀬命は、流れ矢が肘にあたり倒れ、和歌山の竈山に葬られた。
- 20 東征隊は熊野に回り宇陀から奈良に入ることにしたが、熊野では嵐に遭遇し稲氷命、御毛沼命が亡くなった。
- 21 東征隊を追った豊受大神は、戦いが有った河内を避け淡路島に迂回し、和歌山に向かった。
- 22 豊受大神は五瀬命を竈山に慰霊し、熊野で苦戦する神武には神剣・布都御魂を届け励まし、熊野越えで進退極まった時は八咫鳥を派遣した。
- 23 豊受大神と神武は宇陀の高倉山で再会し、このとき豊受大神は神武に東遷後の国造りを託した。
- 24 豊受大神は、お連れした天照大御神の御魂と共に橿原にはいり、新しい高天原をお見せし、加護を願った先人に報告と感謝を行った。天照御魂神社が残る。
- 25 その後、豊受大神は南九州出身の兵と北部九州出身の兵で、勢力争いが起きないよう摂津を経て丹波に身を引いた。
- 26 途中、伏見の稻荷山山頂の三峰から新しい国の安寧を祈った。
- 27 神武は橿原で即位した。

【参考・引用文献】

- 『古事記』 倉野憲司校注、1991年、(株)岩波書店
- 『日本書紀(上) 全現代語訳』 宇治谷孟、1998年、(株)講談社
- 『たかとりが明かす日本建国』 白崎勝、2010年、(株)梓書院
- 『丘と岡が明かす天孫降臨』 白崎勝、2016年、(株)郁朋社
- 『伊邪那美岐が明かす国生み』 白崎勝、2018年、(株)郁朋社
- 『最新「邪馬台国」論争』 安本美典、平成9年、(株)梓書院
- 『忘れられた上代の都「伊都国日向の宮」』 石井好
2002年、(株)郁朋社
- 『風土記』 秋本吉郎、昭和45年、(株)岩波書店
- 『草書体で解く邪馬台国の謎』 井上悦文、2013年、(株)梓書院
- 『日本古代文明の謎』 井上赳夫、昭和45年、(株)大陸書房

『奴国の滅亡』安本美典、1990年、毎日新聞社

『「君が代」は九州王朝の賛歌』古田武彦、1990年、(株)新泉社

『えひめの記憶』愛媛県生涯学習センター

『「熊野の謎と伝説」』澤村経夫、1981年、工作舎

『第二回阿波古代史プロジェクト～天照大神生まれし阿波の橘』制作(有)東阿波ケーブルテレビ、
YouTube

『萬葉集』青木生子他5名校注、昭和51年、(株)新潮社

『津田左右吉歴史論』今井修編、2006年、岩波文庫

『古事記及び日本書紀の研究』津田左右吉、2012年、毎日ワンス

以上